

教会と国家・戦争について

矢口以文

はじめに

国家と教会との間の複雑な関係が始まったのは、313年にコンスタンティヌスが礼拝の自由を宣言し、380年にテオドシウスがキリスト教を国教会にした時代である。それ以後、教会は国家と結びつき、その庇護のもとにおかれたが、同時にいろいろな干渉を受けるようにもなった。教会に対する国家支配が強力になった。

しかし476年に西ローマが滅亡した時、教会は国家権力の支配から解放され、それ以来しばらくは教皇が教権と政治権力の二つの世界に君臨する時代が生まれた。

教皇と王との間に権力をめぐって、絶えず緊張関係が存在し、ある時には教皇が、またある時には王が優位に立つというようなことがあったが、中世の末期に教権優位が著しく後退し、国家権力が拡大した。これが宗教改革時代の背景のひとつだった。

中世の末期まで、教会の中にあつた考えは両剣論に象徴されている。それは1302年の教皇ボニファテウス8世の回勅の中に書かれている説であり、「ペテロの権能には聖俗両剣が含まれ、この2つの剣のひとつは教会によって用いられ、他の剣は教会の意志と許可に基いて教会のために世俗君主によって用いられるとし、教権の優位を主張し、全人類の審判者としての教会の権能を示す⁽²⁾」というものであつた。

しかしこの両剣論に対する批判が教会の中からも生まれてきて、合法的なこの世の支配権力は教会にはではなく、この世の君主のもとにあると主張した。この考えが宗教改革者の底流にあつた。

宗教改革者たちはカトリック教会の取り続けていた両剣論の立場を否定して、アウグスティヌスの唱えた二王国説を受けついだ。神の国と地上の国との二つの王国があり、前者は神を愛するものの社会であり、後

者は自己愛を追求する人々の社会であるとする説である。⁽⁴⁾

これらのことを念頭におきながら、以下において、教会の指導者たちが宗教改革の時代まで、国家権力と戦争に対してどのような態度を取ってきたかを先ず再確認し、そのあとでそれとの関連のうちに、再洗礼派の立場を見てみたい。

第 I 章 正義の戦争の立場

(i) カトリックの場合

正義の戦争という考えが初めて出てくるのは4世紀末のアンブロシウスにおいてである。彼はストア学派や旧約聖書を引用して、戦争を擁護したが、それを受けついで理論づけたのがアウグスティヌスだ⁽⁵⁾った。

アウグスティヌスはローマ帝国を熱狂的に支持したわけではな⁽⁶⁾かった。しかし「国家あるところには、つねに流血の惨事は絶えぬと嘆傷しながらも、だが無秩序には優るといって、その意義(国家の)を認めざるを得な⁽⁷⁾かった」。

レーヴェニヒがアウグスティヌスの国家観について、「国家の一つの課題は教会に異端や不信仰と戦うための世俗援助を与えることにある。……もう一つの課題は、内的小および外的平和の樹立と確保にある。……教会は国家を支配しようとは考えない。教会はキリスト教国家の中でも、異邦者と巡礼者の状態で生きる。というのはキリスト教国家も地上では常に不完全で、自己を罪からひき離すことはできないからである。それ故、アウグスティヌスにより、キリスト教国家に対する真の熱狂はあり得⁽⁸⁾ない」と述べている。

しかしそれにもかかわらず、彼はローマが近隣の国々の侵略から自分を守るための正義の戦争を認めたのだった。「人を殺すことが許される場合」において、「……神の命令によって戦争をしたり、または国家権力の行政者として、最も正しい理性の指図である国家の法律にしたがって犯罪人を死刑にする者たちは、「殺してはならない」と言われるこの戒め⁽⁹⁾に、決して反しているのではない」と主張した。

さて、神の国が地上の国と同一視されるようになってきた時に、極端に熱狂的な考えが生まれて、十字軍となってあらわれてきた⁽¹⁰⁾。正義の戦争ではなくて、イスラム教徒や異教徒に対する積極的な攻撃であった。

正義の戦争の理論に関して言えば、「地上の国」が「国家の完成された共同体」⁽¹¹⁾であると信じるトマス・アクィナスが、それを受けついで更に発展させた。

その理論を要約すると、正義の戦争の条件は第一に、合法的な君主の命令で始められるべきこと、第二に、攻撃される側に、攻撃される当然の理由があること、第三に、戦争する時に、善をおし進め、悪を除去するという正しい意図をもっていること、等である。これが長い間にわたってのカトリック教会の公式な立場であると言えよう。⁽¹²⁾

(ii) 宗教改革主流派の場合

ステイヤーズは宗教改革者の権力または武力に対する立場を次の四つに分析している。(i) 十字軍的、(ii) 現実主義的、⁽¹³⁾(iii) 脱政治的(穏健派)、(iv) 脱政治的(急進派)である。十字軍的な立場は、自分の目的を達成するためには武力を使わざるを得ないというもので、ミュンツァに代表される。現実主義とは、武力を使えば所期の目的は完全な形で実現はできないが、使わないよりもまし、という立場で、その代表者はツヴィングリである。

あとの二つは武力を使えば倫理的な目標は達成されない、という点では一致するが、穏健派は理念の成就には社会平和が必要であり、そのためには武力を使わざるを得ないと言う。ルターの立場である。急進派は再洗礼派の立場で、キリスト者が武器をとることはいかなる場合にも認めない。⁽¹⁴⁾

ステイヤーズはカルヴァンの立場に言及はしてはいないが、彼の弟子たちはツヴィングリの弟子たちと同じ立場を取って、改革派と呼ばれた。

この章においては、十字軍的な立場を取ったミュンツァを除いて、ルター、ツヴィングリ、カルヴァンの国家と戦争への立場を見てみたい。この三人の教会に対する影響が甚大だからである。

(a) ルター

ルターは国家権力は、地上の社会に秩序をもたらすために神から委託

されたものだと考えた。キリスト教の教えを達成するためには秩序が必要な⁽¹⁵⁾のだから、それを維持するために武力を用いざるを得ないと主張した。

神の国がこの世の国よりも上なのは言うまでもないことだが、ルターはこの世が悪魔的な力の支配に全く委ねられているとは信じなかった。個人としての生き方と公人（職業人）としての生き方をはっきり区別したのもルターだった。例えば「軍人もまた救われるか」で、「職務と人、⁽¹⁶⁾仕事と行為者とは別ものである」と言い、国家の命令によって軍人が殺しても、罪にはならないと教える。罪でない所か、神の御旨を行なうことでもあると主張する。

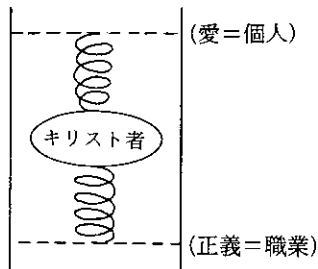
「思うに、剣は悪人を罰し、信仰者を守り、平和を維持するために神が設けられたのである。ローマ13章〔1節以下〕、第1ペテロ3章〔13節以下〕から、戦争や虐殺、また戦争の経過と戦時法がもたらすものが、神によって設けられたということも十分に強く証明される。戦争とは、不正や悪を罰するものでなくて何であろうか。平和と従順とを得る以外に、何のために人は戦争をするのであろうか。

ところで、虐殺や強奪は愛の行ないとはみえないし、そのため素朴な人は、それはキリスト教的な行ないではなく、キリスト教徒が行なうにはふさわしくないと考えるが、実はそれも愛の行ないなのである。というのは、よい医者の場合と同じなのだが、病気がたいへん重くひどく、生命を救うために、手や足や目を切開しなければならぬときに、人がもしその医者の切り落とした手足を見ると、その医者は恐ろしい無慈悲な人であるように思える。しかし、もし人が、医者がそうすることによって救おうとしている身体を見れば、その医者は実はすぐれた誠実な人であり、(それ自身に関する限りでは)よいキリスト教的な行ないをするのだということがわかるのである。だから、軍職に関して、それが悪人を罰し、不正な者を虐殺し、あのような悲惨をまねくことをみると、それは全く非キリスト教的な仕事であり、確かにキリスト教的な愛に反するようにみえる。しかし、それが信仰を守り、それによって婦人や子供、家や敷地、財産、名誉、平和を支え守ることを見れば、その行ないがどんなに

教会と国家・戦争について

尊く、神的であるかということがわかり、私はその職務も、全身が滅びないように足や手を切り落とすものであることに気づくのである。というのは、剣が保護せず、平和を維持しないとすれば、世界中のすべてのものは争いのために滅びてしまうにちがいないからである。それゆえ、このような戦争は永久的な、はかり知れないほどの争いを防ぐための小さな短い争い、大きな不幸を防ぐための小さな不幸、にほかならないからである。⁽¹⁷⁾

このように彼は「悪人を罰し平和を維持する」⁽¹⁸⁾正しい戦争を認める。ジャン・ハワード・ヨーダーはこのルター派の社会倫理を次のような図で示している。⁽¹⁹⁾



キリスト者は個人としては隣人に対して愛や無抵抗の態度でのぞむが、公人（職業人）としては正義の立場で、つまり悪に対しては復讐するという立場でのぞむのである。個人としては隣国の人を愛するが、軍人としては隣国の人を殺すということになる。

メランヒトンの草稿による「アウグスブルグ信仰告白」（1530）には政府や国家権力の問題もあつかわれている。その第16条に次のように言われている。

「この世におけるあらゆる政府と統治と法律は社会に良い秩序をもたらすために、神に委託されて建てられた。キリスト者は罪を犯すことなく公務員になれるし、君主にも裁判官にもなることができるし、帝国の法律やその他の法律に基いて判決を下すことができる。

武器で悪人をこらし、正義の戦争に参加し、軍人としての生活を送り、売買をし、必要な宣誓をなし、財産を持ち、結婚をすることができる。

以上のことがキリスト教的でない⁽²⁰⁾と教える再洗礼派は断罪される」。

ちなみに、再洗礼派は、売買をすること、生きてゆくのに必要な財産を持つこと、結婚することをキリスト教的でないとは言っていない。

(b) ツヴィングリ

エラスムス的な平和主義の立場を離れて、現実主義者になったツヴィングリは、政治の目的は神の王国をこの世に作りあげることだとし、そのためには必要ならば、武器を持って平和を作り出さなければいけないとした。

政治は教会の事ながらも責任を持つべきという中世の考えを受けついだツヴィングリは、チューリッヒはキリスト教の都市になるべきであり、政治もキリスト教的であるべきだと信じた。彼は政治を通して神に奉仕しようとした。⁽²¹⁾

「聖書と剣」の前提は、武器を取ることが正しいという考え方である。「もともと、ルター派の汚物〔=セクト〕は主として都市で活動して受け入れられ、そこから、いたるところで農民の暴動を結果として生じさせてきた。それゆえ、処罰が行なわれなければいけない⁽²²⁾」といったような戦争をかきたてる文章が随所に出てくる。

ミコニウスあての手紙には次のように書いてある。

「毅然として、戦争を恐れないで下さい。ある者たちがしきりに主張する平和は、平和ではなく、戦争です。私が主張し続けている戦争は、平和であり、戦争ではありません。なぜなら、私は誰の血も渴望していませんし、戦乱の騒ぎの中でさえ、血を流させようとは思いません。しかし、偏狭な独裁政治の根本を切倒すことが、私の目的です。このことがなされなければ、福音の真理もその司祭者もわれわれのところでは安全ではありません。残酷なことを考えている

のではなく、私が追求していることは友好と祖国愛なのです。無知のゆえに危険に陥っている者たち〔共同支配地の人びとを暗喩〕を救おうと熱望しているのです。全力をつくして自由を守ろうと努めているのです⁽²³⁾。』

聖書を片手に、剣を片手にしているツヴィングリの像は、まことに彼のそのあたりの事情を象徴しているものと言えるだろう。

(c) カルヴァン

カルヴァンもルターのように、二王国論を受けつ⁽²⁴⁾いだ。つまり、神はこの世の権力者に、秩序を守るように権力を委託したのであり、そのために、キリスト者の市民は国家に従わなければいけないと信じた⁽²⁵⁾。そしてカルヴァンはジュネーブに神政政治の政府を作りあげ、すべての市民が神を拜むことをもくろ⁽²⁶⁾んだ。

カルヴァンは政府の役割について「……行政官が任命されたのは公共の純潔、節度、誠実、静穏の庇護者または擁護者としてであり、その努力はただひとつ、万人の共通の幸福と平和を追求することであると知るのである。このことはしかし、善人を悪人の悪から守り、抑圧された者たちに助けと庇護を与えないかぎり実現できないので、彼らは権力で武装し、これによって悪人や犯罪人どもを公にきびしく罰する。この悪人どもの不正によって公共の平和は乱され追放されるのだから⁽²⁷⁾」と言い、キリスト者が場合によっては血を流すことがあり得ると主張する。

更に、正義の戦争を次のように肯定する。

「だが王や人民はこのような公的報復を行なうため、武器を取ることが時に必要である。これと同じ理由で、次のように企てられた戦争が正当であるとみなすことができる。すなわち、もし王や人民に、彼らの領土の静穏を保ち、不穏な人々の反乱の動きを押え、暴力的に抑圧されている人々を助け、悪行を罰するために権力が与えられているのなら、私人ひとりひとりの休息も、万人の公共の平穏をも乱す者や、反乱を起したり、暴力的抑圧や恥ずべき悪行をやっている者たちを抑えるために権力を用いる以上にふさわしい用い方が

あるだろうか。もし彼らが法の守り手また擁護者であるべきであるなら、その犯罪によって法の規律を破壊してしまうような者たちすべての努力を、ひとしく根こぎにするべきだ。そうだ、もし彼らが少数の人々を傷つけるだけの悪行を行う盗人を罰するのが正当であるなら、王国全体を略奪にまかせ、苦しめられ荒らされながら罰せずにおいてよいものだろうか。なぜなら他国へ何らの権利もないのに押し入り、敵意をもってこれを苦しめる者は王であろうが庶民の最下層の者であろうが何の区別もなく、ひとしなみに盗人と見なされ、罰せられなければならないからである。しかしながら、ここで自分の欲望にほんの少しでも従うことのないよう細心の注意するのは行政官すべてのつとめである。むしろ彼らは、処罰を実行しなければならぬ時は、向う見ずな怒りに身をまかせることなく、憎しみにとらわれることなく、仮借ない厳格さに燃え上がることのないようにすべきである。アウグスティヌスが言ったように、『彼らは人をその人自身の罪過のゆえに罰するが、その人の中にある人間共通の本性については憐みをもたなければならない』。あるいはまた、敵すなわち武装した盗人に対して武器を用いるときは軽々しく機会をとらえないように、その機会が与えられたときでさえも、ぎりぎりの必要に迫られてでなければ機会を求めてはならない。もし私たちが、『戦争は平和を願うことをこそ目指すべきだ』といったあの異教徒の求めたよりはるかにまさったことを行わなければならないとしたら、武力に訴えるよりも先にあらゆることを試みなければならないのはたしかである。つまり、どちらの場合にも、行政官は個人的感情にとらわれてしまつてはならず、ただ公的感覚によって導かなければならない。さもなければ彼らはその権力をめちやくちやに乱用することになる。この権力は彼ら自身の利益のために与えられたのではなく、他の人々の益と奉仕のために与えられたのであるのに。さらに、戦争の正当性の同じ根拠から、『防衛』、『同盟』その他『政治的施設』の理由が出て来る。『防衛』と私が呼ぶのは国境を守るために町々に配備されているものであり、『同盟』とは隣接する君主たちが、何かの混乱が自分たちの国土に起きたとき、相互に助け合い、人類共通の敵を倒すため協力し合うようにと契約を結ぶこと

であり、『政治的施設』とは戦術に用いられる事物のことである。⁽²⁸⁾
ツヴィングリとカルヴァンの改革に基礎をおいている改革派教会は「第2回ヘルベチア信仰告白」において、政府、行政官、戦争について述べているが、それは大筋においてカルヴァンの考えに一致する。

秩序を守るために武力を用いるべきであるというのである。次のようにある。「従ってあらゆる犯罪人に、盗人に、人殺しに、暴虐な者に、神を冒とくする者に、偽証をする者に、この神の剣をぬくべきである。神の威光を冒とくし、教会を悩ませ、逐にはそれを破滅させる異端者たちを鎮圧すべきである」⁽²⁹⁾

更に戦争に関しては次のように言う。「戦争によって人々の安全を維持する必要があるなら、戦争を行ないなさい。即ち初めにあらゆる可能な手段で平和を求め、戦争以外に自分の国民を救うことができない時には、行ないなさい。行政官が信仰を持ってこれらのことを行なうなら、良きわざを持って神に仕えることになるので、主からの祝福があるだろう。再洗礼派は非難すべきである。彼らの主張によれば、キリスト者は行政官になれない。人を死刑にすることも戦争をすることもできない。行政官は宣誓やそれに類することを強いることはできない」⁽³⁰⁾

第II章 再洗礼派の場合

再洗礼派の人々も当時の宗教改革者たちと同様に二王国論を信じていた。例えばメノ・シモンズは「聖書によれば二つの相反する王国がある。一人は平和の君であり、もう一人は争いの君主である。それぞれにそれぞれの特有な王国がある。それぞれの君主にふさわしい王国である。平和の君はイエスであり、その王国は平和の王国であり、即ち教会である……」⁽³¹⁾と書いている。

しかし宗教改革主流派と比べると、再洗礼派の場合には一般的に、神の王国とこの世の王国との間に、よりはっきりした一線を画している。即ち、従来の教会にはなかった政教のはっきりした分離が、再洗礼派の人々の考えにあらわれている。

例えば、ルターやカルヴァンの主張するように、メノ・シモンズは行政官の役割を次のように言う。「……政治を行なう人々よ、あなた方が神

からゆだねられている役割は次のことです。即ち、神を恐れながら、公平に、キリスト者の分別を持って、盗人、殺人者、男色をする者、姦淫をする者、女たらし、魔術を行なってたぶらかす者、暴力を行なう者、追いはぎ、強盗などの明らかな犯罪人を懲らし、罰することです。あなた方の役割は人と人との間の争いを裁き、しいたげられている者を、しいたげる者から救い出すことです」。

再洗礼派と宗教改革主流派との違いのひとつは、キリスト者が政府にどう関わるかにある。⁽³³⁾ 主流派に言わせれば、キリスト者は政府のいかなる機関にも参加できる。死刑執行人にもなれるし、戦争を始める行政官にもなれるし、戦争をする軍人にもなれる。再洗礼派の大部分のものによると、そのような行政官にはなれないし、いかなる場合にも殺してはいけない。

例えばフツライト派のピーター・リーデマンは、キリストの国とこの世の国との違いを説明したあとで、キリスト者のこの世での生き方にふれ、「政府の権威は怒りのために与えられたのであって、キリストにはふさわしくないし、キリストのものでもない。従ってキリスト者は支配者にはなれないし、支配者はキリスト者にはなれない」⁽³⁴⁾ と言う。

支配者が救われるためには「キリストの⁽³⁵⁾ように己れの栄光を捨て去り、キリストと共にへり下り、キリストに従う」ことが必要である。キリストの弟子として歩くことが条件になってくる。グレーベル、マンツ、ザトラー、フート、フッター等の考えでもある。

1527年の「シュライトハイム信仰告白」にも同様なことが記されている。権力者たちの神に与えられた役割を明らかにしたあとで、次のように書いてある。

「最後に、以下の理由によってキリスト者は行政官になれない。即ち、政府の行政職は肉によるものである。これに対してキリスト者のつとめは霊による。行政官の母国はこの世であるが、キリスト者の国は天国にある。行政官の市民権はこの世にあるが、キリスト者のは天国にある。紛争や戦争を解決する武器は、行政官にあっては、この世的な武器であり、それは肉に対するものだが、キリスト者の武器は霊的なものであり、悪霊の武器と戦かうものである。この世

の人々はこの世の武器で武装するが、キリスト者は神の武具、即ち真理、正義、平和、信仰、救い、御言葉で身をかためる⁽³⁶⁾」。

ここには、この世の国は神に任命されたものではあるが、神の御国とは全く違うという考えがはっきり表明されている。キリスト教国家があり得るという考え方が全面的に否定されている。カトリックや宗教改革主流派の伝統的な国家観とは異なった考え方である。政治と宗教の密着が否定され、キリスト者による暴力が否定される。

敵の軍隊が攻めてきた時にさえも、武器を取るべきではない、とザトラーは言う。

「……トルコ軍が攻めてきても、私たちは武器を取って抵抗すべきではない。「殺すな」〔マタイ5：21〕と書いてあるではないか。トルコ軍に対しても、迫害する他の誰に対しても、自分を守るために武器を取るべきではない。ただ神に熱心に祈って、彼らを追い払うように、迫害するのを止めさせるようお願いしなさい⁽³⁷⁾」。

国家権力は神に任命されてはいるが、それは墮落して、国家は悪魔的なものの支配のもとにあるというのが再洗礼派の見方である。その墮落の状態が例えばメノ・シモンズの著作の中では次のように描かれている。王や支配者たちに対して

「あなた方が求め、守ろうとするのは正真正銘の現世欲ではありませんか。あなた方の家や宮廷にあるのは、きらびやかななやかさ、これみよがしの衣類、ごうまんや横柄、飽くことのない貪欲、憎悪とねたみ、陰口、裏切り、売春、そそのかし、ばくち、かけ、どんちゃん騒ぎ、ダンス、ののしり、決闘、暴力の類です⁽³⁸⁾」。

と言って非難をしている。当時の権力者たちが教会のメンバーでありながら、いかに反キリスト的生活を送っていたかをこれらの文章からかい間みることができる。このような現実凝視と新約聖書の研究から生まれたのが、再洗礼派の国家観であり、戦争観であった。

しかしこの世は神の国とは全く異なるものだと主張はしたが、一部の例外を除いて、彼らはこの世から去ってユートピアを作りあげようとはしなかった。彼らはこの世から分離せずに、この世に、この世の人々と共に住み、この世にあって、キリストに従って歩いてゆこうとした。だからこそこの世の人々に対する伝道が活発に行なわれ、この世の指導者たちに対してしばしば警告を⁽³⁹⁾発し、事と次第によっては、公開討論をさえものぞんだのであった。

国家と戦争に関して、再洗礼派の中に微妙な意見の違いがなかったわけではない。⁽⁴⁰⁾例えば、政府は神に任命されてはいるが、キリスト者は行政官になれないという主張に矛盾を感じたフープマイヤーは、その考えを拒否して、「キリスト者が良心を持って行動すれば、裁判官になって裁判したり、⁽⁴¹⁾議員になってこの世的な事がらを決定できることは誰にでも明らかだ」と言い、また「キリスト者も、神の秩序に従い、神にかわって、悪人に対して剣を帯び、罰することができる。良いものを守り、悪を罰するために、剣を帯びるように神に命じられているのだから」⁽⁴²⁾と言って、伝統的な教会の立場を取る。「彼がどのように権力を用いたかについては、終りの日にその報告を出さなければいけない」⁽⁴³⁾とルカ 16章 2節を引用する時、それはカルヴァンの「委託を受けた者は委託したもうた御方に『つとめの報告』をしなければならない」という考え方を思い出させる。⁽⁴⁴⁾

しかしクラッセンも言うように、ルターやカルヴァンとの違いは次の文章の中に見出せる。戦争に参加するように招集された時には政府に協力をすべきだが、

「しかし国民は先ず初めに支配者の心の中を注意深く調べるべきである。支配者が国民共通の利益や平和ではなくて、ごうまん、たかぶり、どん欲、ねたみ、憎悪、自己追求といった動機で戦いを行なおうとしていないかどうか、⁽⁴⁵⁾調べてみるべきだ」

と言い、もし利己的動機が原因なら、戦争を拒否すべきだと結論する。また、自分たちの政府が愚かな政府なら、合法的に、平和的に除去できるとも主張する。⁽⁴⁶⁾

「しかしもし政府が幼稚で、愚かで、統治の能力がないなら、それをくつがえして他の政府が選ばれるようにするのが正しい。なぜなら、悪い政府のために、神はしばしば国民全体を罰するかもしれないから。しかし政府交代が法的に、平和のうちに、大きな害や暴動もなくなされることが出来ないなら、忍耐すべきである。神は怒りのためにその政府を私たちに与えたのであり、私たちの罪のために私たちに罰することを望んでおられる。私たちにはそれ以外の価値がないのだ⁽⁴⁷⁾」。

ここにはカルヴァン等の主張した抵抗権の考えが見られるが、しかしそれも「法的に平和的に」なされるべきという所が違う点であろう。

マーベックやデングもキリスト者は政府の指導者になり得ると考えた⁽⁴⁸⁾。しかし二人とも、政界や国家が汚れきっているから、いつまでもキリスト者としてそこにふみとどまることはできないだろうと言う。王の命令に臣下は必ず従わなければいけないという当時の封建的な、専政主義的な状況を考えれば、うなづける。例えばマーベックは「弁護」の中で、次のように言っている、

「キリスト者がこの世の支配者になることは困難である一。もしなかったとしても、そしてもしこの世の国に関するあらゆることが真に人道的で、神の御旨にかなうように、秩序にしたがってなされ、またその人があやまちなく治めたとしても、どの位長い間、自分の良心が支配者であることを許し続けるだろうか。これは彼が主イエス・キリストに従い、キリスト者の忍耐を持ち、キリスト者としてのまことの戦いを続け、騎士道を捨てず、また少くとも自分の魂やキリスト教を傷つけることを望まないとは仮定した場合の質問である。なぜなら誰も二人の主人に、即ちこの世の行政を司さどる王や皇帝と、⁽⁴⁹⁾ 霊の天国を司さどるキリストとに兼ね仕えることはできないのだから」。

国家の権力者に対して、ある意味でかなりの希望を持っていたのはメノ・シモンズだった。少くとも、再洗礼派に転向した初期の頃には、キ

リスト者も行政官になり得ると思っていた、とステューヤーズは主張する⁽⁵⁰⁾。後期には、自分の良心に反して血を流すようなことに関わる必要がない限りにおいては、行政官になり得るという考え方⁽⁵¹⁾に変わっている。ポルンホイザーによれば、メノは「シュライトハイム信仰告白」の影響で、そのように変わったのだらうと推論する。⁽⁵²⁾

メノは政治を行なっている教会員の行政官に悔い改めを呼びかける。「政治を行なう人々よ、キリストの御言葉を信じ、神の怒りを恐れ、正義を實踐し、未亡人や孤児を助け、人々の争いを正しく裁きなさい。人を地位のために恐れたり、さげすんだりしてはいけません。貪欲を憎み、罰する時は正しく罰し、神の御言葉が自由に教えられるように意図しなさい。人が真理の道を歩こうとするのを妨げてはいけません。このような高い任務につくようにあなたたちを召している方の王座に頭を下げなさい。そうすればあなたたちの王冠は永遠に確固としたものになるでしょう」。⁽⁵³⁾

この初期の論文には、伝統的な教会の国家観が目のをぞかせている。キリスト教国家への希望がみえている。しかしそのような希みは、彼が現実の社会を目のあたりに見たり、経験した時に、次第に薄らいでいったのだらう。この世をも神は支配し、導いているという信仰と、現実の暗黒な社会との間で揺れ動いているメノの姿が見えてくる。

そしてメノは、この世の支配のし方とは違うキリスト者の生き方を次のように表現する。

「彼らは平和の子供たちで、
剣を打ちのばしてすきの刃にし、
槍を打って鎌にし、
戦うことはもう知りません。
シーザーのものはシーザーにかえし、
神のものは神にかえます。
彼らの剣は霊の剣であり、
彼らはそれを聖霊に導かれた
良心によって使いこなします」。⁽⁵⁴⁾

この世にあって、聖霊に導かれて、平和の道を歩こうとするキリスト者の姿がここにある。

罪を犯したものはこの世では剣によって処罰されるが、それに対して教会には破門があると再洗礼派は言う。「わたしたちは破門について意見が一致した。破門は、主の誠命に従って歩むべく、主に一身を委ねた者すべて、および、キリストの一つのからだに、洗礼を受け〔て加えられ〕、兄弟あるいは姉妹と呼ばれる者すべて〔の中〕で、しかも時おり道を踏み外し、誤りと罪とに陥り、思わず不意を打たれる者に適用されるべきである。このような者は、キリストの命令に従って〔マタイ 18 章〕、二度個人的に戒告され、三度目には全会衆の前で公に処罰〔破門〕されるべきである。しかし、このようなことは霊の定めに従い、パン裂きの前で行なわれるべきである。そうすれば、わたしたちは心一つにして、一つ愛の中でひとつのパンを裂き、一つ杯から飲むことができるであろう⁽⁵⁵⁾」と言う。

教会員である者が罪を犯した時に、そして悔い改めようとしない時に、破門にされなければいけないというのである。罪を犯したキリスト者は、教会⁽⁵⁶⁾の中では剣で罰せられるのではなく、聖餐式から外されるという主旨で、礼拝を拒否されるとか、日常生活の中で村八分にされる、というのではない。それは教会の決定に逆って兵役につくものにもあてはまる⁽⁵⁷⁾。本人が悔い改めて、本来の信仰に帰ることを願ってなされたのである⁽⁵⁷⁾。国家と違って、教会は自発的に信じる者たちの群であるという前提に立っている。

破門を実施する再洗礼派は完全主義であるという批判があったが⁽⁵⁸⁾、上記のメノ・シモンズの引用文にもあるように、彼らは聖霊に導かれることの重大さを確信していた。完全なキリスト者になり得るとか、教会はこの世で完全になり得るとは言っていない。不完全な姿のままで、つまずきながらも、聖霊によって力を与えられて、キリストの平和の道を歩む必要があることが強調されているのである。

「シュライトハイム告白」には、父なる神から聖霊がすべての信者に送られてきて、この苦しみの時期に終りに至るまで、力と慰めと忍耐が与えられる、とある⁽⁵⁹⁾。またその告白の結論部で、キリストが私たちに罪からあがない、きよめ、御自身の良きわざをなす熱心な民になるように

して下さい、と祈っている。⁽⁶⁰⁾神の力にうながされて、神のわざにあずかれるという信仰である。再洗礼派の人々が、そのわざにあずかる時に、自分のいたらなさを告白している。⁽⁶¹⁾彼らは完全主義ではなかった。⁽⁶²⁾

再洗礼派はこの世から分離したという批判があったが、「シュライトハイム告白」は、「私たちはこの世において、まじめに、正しく、神に喜ばれる生活をすべきである」⁽⁶³⁾と言っている。この世から離れなさい、とはいっていない。この世に住んでいるが、この世の、または国家のものでなくて、神のものである、と主張している。

退く所か、グレーベル等は積極的にツヴィングリや市当局に神学と政治についての議論をいどんだし、⁽⁶⁴⁾伝道活動にも従事した。メノ・シモンズの著作を読むと、彼もこの世の実態から目をそむけず、政界やキリスト教会の指導者の墮落を絶えず、鋭く批判し、警告し、悔い改めを呼びかけた。⁽⁶⁵⁾メノはまた、人間はいかなる地位にあらうと、神の前では同じであると述べているが、このことも民主主義という立場から見ると注目に値する。⁽⁶⁶⁾

再洗礼派がこの世から逃れて隠れるようになったのは、その平和主義、政教分離という立場のために、カトリックとプロテスタント主流派から迫害されたことにある。迫害した側の根拠は正義の戦争の理念であり、また十字軍的な考え方であった。

おわりに

以上、カトリックと宗教改革主流派の国家観と戦争観を見、そのあとで再洗礼派の立場を考察してきた。前者のものはキリスト教国家と国家教会とを前提にしており、幼児洗礼に象徴されるように、信仰の自由はなく、政教分離は許されなかった。正義の戦争の立場を取り、キリスト者は武器を取って戦うことが要請された。

再洗礼派については、国家に対する態度に多少の微妙な食い違いはあっても、キリスト者による戦争参加には一致して反対している。幼児洗礼を拒否して、成人洗礼を主張したことから明らかなように、彼らの教会を信じる者たちの群であり、国家とは一線が画される。ここに政教分離の芽生えを見ることができる。国家権力に対しては、聖書の立場から、

厳しい態度をもって警告し、批判する。国家の指導者がキリスト教の規準に達し得ないことを認めるが、同時に彼らのための祈りがある。

正義の戦争の立場と絶対平和主義の立場、それにこの論文では詳しく触れなかったが、十字軍的な立場が、現代の教会にも受けつがれていることを最後につけ加えておきたい。

尚、クラッセンの編集した Anabaptism in Outline (『再洗礼派大要』) から、関係部分を訳出したので、参考のために〔注〕のあとに加えておく。

〔注〕

- (1) 『キリスト教倫理辞典』(日本基督教団出版局, 1967年) 56—57頁参照。
- (2) 『キリスト教大事典』(教文館, 昭和38年) 1137頁。
- (3) James M. Stayer, Anabaptists and the Sword (Coronado Press, 1976) PP. 1—2 及び James Wood, Jr., The Problem of Nationalism in Church-State Relationship (Herald Press, 1968) P. 9 参照。
- (4) 藤川吉美『正義論の歴史』(論創社, 1984年) 32頁。
- (5) 宮田光雄『平和の思想史的研究』(創文社, 1983年) 48—49頁。
- (6) 『同書』50頁。
- (7) 藤川吉美『前掲書』35頁。
- (8) W. フォン・レーヴェニヒ (宮谷, 森訳) 『アウグスティヌス 生涯と業績』(日本基督教団出版局, 1984年) 253頁。
- (9) 赤木, 泉, 金子訳 『アウグスティヌス著作集第11巻神の国』(教文館, 1980年) 72頁。
- (10) 藤川吉美『前掲書』36頁。
- (11) 『同書』37頁。
- (12) William R. Durland, No King But Caesar (Herald Press, 1975) pp. 97—99.
- (13) Stayer『前掲書』2—4頁。
- (14) 『同書』4頁。
- (15) 『同書』3頁。
- (16) ルター著作集編集委員会『ルター著作集第1集7』(聖文社, 1966) 553頁。
- (17) 『同書』554—555頁。

- (18) 『同書』 558—559 頁。
- (19) J. H. Yoder, The Christian Witness to the State (Faith and Life Press, 1964) 63 頁。
- (20) J. H. Leith (ed.) Creeds of the Churches (Anchor Books, Doubleday & Company, Inc., 1963) 72—73 頁。
- (21) Stayer 『前掲書』 61 頁。
- (22) 出村, 森田, 内山訳 『宗教改革著作集 5 ツヴィングリとその周辺 1』 (教文館, 1984 年) 360 頁。
- (23) 中村, 瀬原, 倉塚, 田中, 久米, 森田訳 『原典宗教改革史』 (ヨルダン社, 1976 年) 293 頁。
- (24) 渡辺信夫 『カルヴァンの教会論』 (改革社, 1976 年) 329 頁。
- (25) 『同書』 334 頁。
- (26) R. H. Bainton, Christian Attitude toward War and Peace (Abingdon Press, 1960) 58 頁と 145 頁参照。
- (27) 久米あつみ訳 『宗教改革著作集 9 カルヴァンとその周辺 1』 (教文館, 1986) 352 頁。
- (28) 『同書』 354—356 頁。
- (29) Leith 『前掲書』 191 頁
- (30) 『同書』 191 頁。
- (31) Walter Klassen (ed.), Anabaptism in Outline (Herald Press, 1981) 280 頁。
- (32) 『同書』 250—256 頁。
- (33) 『同書』 245 頁。
- (34) 『同書』 250—261 頁。
- (35) 『同書』 262 頁。
- (36) Leith 『前掲書』 287 頁。
- (37) Klassen 『前掲書』 27 頁。
- (38) 『同書』 257 頁。
- (39) 榑原巖 『アナバプティスト古典時代の歴史的研究』 (平凡社 1972 年) の第 6 章 「アナバプティスト運動の胎動」 参照。
- (40) Klassen 『前掲書』 245 頁。
- (41) 『同書』 248 頁。
- (42) 『同書』 248 頁。
- (43) 『同書』 248 頁。
- (44) 渡辺信夫 『前掲書』 334 頁参照。

- (45) Klassen 『前掲書』 271 頁。
- (46) 『同書』 246 頁。
- (47) 『同書』 271 頁。
- (48) 『同書』 245 頁。
- (49) 『同書』 263 頁。
- (50) Stayer 『前掲書』 313 頁。
- (51) 『同書』 327 頁。
- (52) The Mennonite Quarterly Review (The Mennonite Historical Society, Oct., 1986) 493 頁。
- (53) Klassen 『前掲書』 256 頁。
- (54) Lenard Verduin (tr.), The Complete Writings of Menno Simons (Herald Press, 1966) 94 頁。以下この本は Menno と省略する。
- (55) 出村彰 『スイス宗教改革史研究』 (日本基督教団出版局, 1971 年) 340 頁参照。
- (56) 『同書』 342 頁参照。
- (57) Menno 94 頁。
- (58) 出村彰 『前掲書』 341 頁, 渡辺信雄 『前掲書』 325 頁, Menno 94 頁を参照。
- (59) Leith 『前掲書』 282 頁。
- (60) 『同書』 292 頁。
- (61) 例えば Menno の “Encouragement to Christian Believers” (1046 頁以降) 参照。
- (62) 出村彰 『前掲書』 341 頁。
- (63) Leith 『前掲書』 292 頁。
- (64) 榊原巖 『前掲書』 の第 6 章参照。
- (65) Klassen 『前掲書』 256 頁参照。
- (66) Menno 94 頁参照。「破門は高慢で、人を軽べつする者に対して行なわれます……身分が高かろうと、金持ちだろうと、関係がありません」と言っている。

ピーター・リーデマン

「支配者はキリスト者でありうるか」から

ここで地上の王国とは全く異なる神の国の支配が始まる。従って古いものは過ぎ去らねばならない。ユダヤ王家に象徴される通りである。「英雄のキリストが来るまでは、王権はユダから去ることはない」と聖書にあるよ

うに、キリストがこられるまでは王権はユダヤにあった。しかしそれはキリストにおいて打ち破られ、終わった。キリストが今や父祖ダビデの王座に座り、真のイスラエルの王となった。古い王国とは違って、この世の権力に守られることのない新しい王国を始められた。キリストの時まで神の民であったユダヤ人の支配はキリストにおいて終わりを告げ、王権はユダヤ人から取りあげられた。キリストの中に古いユダヤ的な権力が存在していないことは明らかである。キリストの希みはキリスト者たちを霊の剣でのみ支配することである。この世の権力がユダヤ人の手から取りあげられ、異教徒に渡されたことは、それ以後神の民はこの世的な権力を用いないことを、これを使って支配すべきではないことを意味する。キリストの霊によってのみ支配され、導かれなければいけないことを意味する。この世の権力が異教徒に引き渡されたということは、キリストに服従しない者は、異教徒であろうと不信仰の者であろうと、みなその不服従のゆえに罰せられなければいけないことを意味する。このようにして、政府の権威はキリストの外にあるのであり、中にはない。

かくてキリストの中におられる神のみがその民の王であり、指揮者である。「神はあらゆる民の上に支配者をおいたが、イスラエルにあっては神のみが主である」と書かれてある通りである。神のみが霊的な王であり、その下には霊的なしもべたちがいる。神もしもべたちも霊の剣を使って魂と霊とをつき刺すのである。

「私はわが王をシオンの聖なる山に立てた」とあるように、み子は父に任命され、この世の王のように怒りのためでなく、恵みを与えるためにこの世につかわされ、私たちすべてのものの恵みの源になった。キリストにあってあらゆる人々が祝福されると約束されていた通りである。この世の王は、人の血を流す者に報復するように任命されたが、キリストは人の霊を守るために任命された。この世の王は悪に復讐するために任命され、キリストは悪に善で報いるために任命された。この世の王は敵を憎むために任命され、キリストは敵を愛するために任命された。かくてキリストは王の王であり、同時にこの世のいかなる支配者とも全く異なる。キリストは言う、「わたしの国はこの世のものではない。もしわたしの国がこの世のものであれば、わたしに従っている者たちは、わたしをユダヤ人に渡さないように戦うだろう」(ヨハネ 18:18)。

このようにして、キリストはこの世のものとは全く違った神の王国を築き、自分のしもべたちがその支配に従い、自分になることを望む。彼はしもべたちにこう言う、「異邦の王たちはその民の上に君臨し、また、

権力をふるっている者たちは愚人と呼ばれる。しかし、あなたがたは、そうであってはならない。かえって、あなたがたの中でいちばん偉い人はいちばん若い者のように、指導する人は仕える者のようになるべきである。従ってキリストとそのしもべたちの栄光は、この世の栄光をすべて取り除くことにある。それを除けばそれほど、キリストの王国で与えられる栄光は大きくなる。「だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるであろう」とある通りである。王であるキリストの中に、神の全き祝福があるのである。いや、キリスト御自身が祝福そのものである。怒りのために与えられたものはすべてキリストにあって終わり、キリストとは関係がない。政府の権威は怒りのために与えられたのであって、キリストにはふさわしくないし、キリストのものでもない。従ってキリスト者は支配者にはなれないし、支配者はキリスト者にはなれない。祝福の子は怒りの子にはなり得ないから。キリストにおいては、この世の権力ではなくて、霊の力が人々を支配する。霊の力の支配が行きとどいている所では、この世の権力はふさわしくないし、必要もない。

しかしもし誰かが「この世の権力は人の悪をおさえるのに必要だ」と言うなら、それは悪を罰するために異教徒に引き渡された、と答えておいた。それは私たちの関心事ではない。パウロが「外の人たちをさばくのは、わたしのすることだろうか」と言っている通りである。従ってキリスト者はこの世の支配者になることはできない。

「それではこの考えによれば、政府権力者に生命の道が閉ざされているではないか！」と誰かが言うかもしれない。「そんなことはない」と私たちは答える。「すべて重荷を負うて苦勞しているものは、わたしのもとにきなさい。あなた方を休ませてあげよう」とキリストが言っているからである。従って生命の道は誰にでも……支配者にもその下にいる者にも等しく開かれている。自分の所にくる者は誰であってもキリストは決して追いかえしはしない。

従って支配者はキリストのように己れの栄光を捨て去り、キリストと共にへり下り、キリストに従うならば、他の人々に対するのと同様に、生命の道が開かれるであろう。しかしキリストが人々に働きかける時、生きておられた時になされたこと以外のことはなされない。即ち人々が王にしようとした時、そこから逃れられたではないか。

しかしもし支配者の精神がくだかれずに、己れの栄光にしがみついているなら、その人に「あなたがたのうちで、自分の財産をことごとく、自分の生命を含めて、捨て切るものでなくては、わたしの弟子となることはで

きない」とキリストは言う。ここから明らかなように、政府の権力者だけではなく、この世のものにしがみついて、キリストのためにそれらを捨てないものは誰でもキリスト者ではない。

ビルグラム・マーベック

「弁護」から

キリスト者がこの世の支配者になることは難しい……。もしなったとして、そしてもしこの世の国に関するあらゆることが、真に人道的で神の御旨にかなう秩序に従ってなされ、またその人があやまちなくおさめたとしても、どの位長い間、自分の良心が支配者であることを許し続けるだろうか。これは、彼が主イエス・キリストに従い、キリスト者の忍耐を持ち、キリスト者としてのまことの戦いを続け、騎士道を捨てず、また少なくとも自分の魂やキリスト教を傷つけることを望まないとは仮定した場合の質問である。なぜなら誰も二人の主人に、即ちこの世の行政を司る王や皇帝と、霊の天国を司るキリストとに兼ね仕えることはできないのだから。

ハンス・デンク

「真の愛について」から

世の中が悪いという点から見れば、権力自体が間違ったものではない。なぜなら政府は神の怒りという面で仕えるのだから。私の言いたいことは、愛は自分の子供たちにもっと良い方法を、即ち神の恵みに仕えることを教えるということだ。なぜなら愛の性質というものは、人を傷つけることを望まず、出来る限りすべての人を向上させようとするものだから。家の主人は、神が自分を扱うように、自分の妻、子供、召使を扱うべきである。権力は愛と両立し得ないものではない。政府がそのように行動するのが可能な限りは、十分にキリスト教的であり得る。しかしこの世の中はそのようなことをいつまでも許しておくことはしないから、神の友は政府の中にいるべきではない。外に出るべきである。もしキリストを主として、従い続けたいならである。主を愛するものは、己れの身分がどうであれ、主を愛する。しかし神を真に愛する者の特徴がなんであるかを、即ち、主のためにあらゆる権力を捨てて、主以外の誰にも従うべきではないことを、私たちは忘れてはいけない。

バルタザール・フープマイヤー

「権力について」から

キリスト者が良心を持って行動すれば、裁判官になって裁判したり、議員になってこの世的な事がらを決定できることは誰にでも明らかだ。係争事件や訴訟事件であっても、その当事者がその件を不信者の裁判官の前に持ち出すなら、もっと間違いを犯すことになろう。もしキリスト者が御言葉の力において宣告をする裁判官になれるとするなら、同様に、正義の手を持って秩序を守り、不正な者を罰する者にもなることができる。なぜならもし悪人を処罰する責任が誰にもないなら、法律、裁判所、裁判官に何の良い事があろうか。もし、履くものがないなら、靴に何の良い所があろうか。議員、裁判所、法律は悪ではないことに注意してほしい。係争中のものが罪を認め、然もなおかつその判決に不服である時でさえ、裁判官はキリスト者であり得るし、キリスト者でなければいけない。かくてキリスト者も、神の秩序に従って、神にかわって、悪人に対して剣を帯び、罰することができる。良いものを守り、悪を罰するために、剣を帯びるように神に命じられているのだから。

*

*

キリスト者は誰をも憎まず、うらやまず、あらゆる人々を愛する。かくてキリスト者の行政官には敵はいない。なぜなら誰をも憎まず、うらやまないから。彼が権力を執行するのはねたみや憎悪からではなくて、神の命令だからである。悪人の処罰は憎悪、ねたみ、敵意とは関係がない。もしあるなら、神御自身が人を憎み、ねたむ敵になるだろう。そうではない。神が悪人を罰する時、ねたみや憎悪からするのではなく、正義からするのである。正義を重んじるキリスト者の裁判官は自分が罰する者を憎まない。その人の犯罪を残念に思う。キリスト者の裁判官の行うことは何でも、神の厳粛な命令だ。神は彼を御自分のしもべとし、正義を執行するための権力を与えた。彼がどのように権力を用いたかについては、終わりの日にその報告を出さなければいけない。彼の権力は神の愛のむち以外の何ものでもない。彼はそのむちをもって悪人をこらすように命じられている。神が善と呼ぶものは善である。もし神があなたの息子を殺せと命じるなら、それもまた良いわざである。

*

*

もし政府にどうしてもその必要があつて、悪人を罰したいが、自分たちだけではそうできない時がある。そのような時に、国民は必要があれば支配者を助ける義務がある。即ち、政府が緊急な合図か手紙か他の手段によ

って彼らを召集し、神の御旨によって悪人を滅ぼさなければいけないという時には、政府に協力しなければいけない。しかし国民は先ず初めに支配者の心の中を注意深く調べるべきである。支配者が国民共通の利益や平和ではなくて、ごうまん、たかぶり、どん欲、ねたみ、憎悪、自己追及といった動機で戦いを行おうとしてはいないかどうか調べてみるべきだ。その場合には、神の命令に応じた剣を取ることはないだろう。しかしもし現在の政府が悪人を罰するのは、信心深い者たちが害を受けることなく安心して生活するためであると結論づけるなら、召集される毎にできるだけ協力し、助言しなさい。そうすることで、あなた方は神の命令を行い、御旨を行うのであり、人間のわざを行うのではない。しかしもし政府が幼稚で、愚かで、統治の能力がないのなら、それをくつがえし、他の政府が選ばれるようにするのが正しい。なぜなら、悪い政府のために、神はしばしば国民全体を罰するかもしれないから。しかし政府交代が法的に、平和のうちに、大きな害や暴動もなくなされることが出来ないなら、忍耐すべきである。神は怒りのためにその政府を私たちに与えたのであり、私たちの罪のために私たちに罰することを望んでおられる。私たちにはそれ以外の価値がないのだ。

メノ・シモンズ

「キリスト教教義の基礎」から

従って、政治を行う人々よ、あなた方が神からゆだねられた役割は次のことです。即ち、神を恐れながら、公平に、キリスト者の分別を持って、盗人、殺人者、男色をする者、姦淫をする者、女たらし、魔術を行ってたぶらかす者、暴力を行う者、追いはぎ、強盗などの明らかな犯罪人を懲らし、罰することです。あなた方の役割は人と人との間の争いを裁き、しいたげられている者をしいたげる者から救い出すことです。また、憐れなよるべない多くの人々を無残にも破滅に導くペテン師たちを、正当な方法で、即ち暴虐非道な行為や血を流すことはしないで、抑制することです。そのペテン師たちが司祭であろうと、修道士であろうと、説教者であろうと、洗礼を受けている者であろうとなかろうと、あなた方の役割は彼らを抑制し、主の全能な主権から、唯一にして永遠なる救い主イエス・キリストから、聖霊から、恵みの御言葉から、それ以上離れることがないように配慮すべきです。また彼らがこれまでのように、真理のみせかけのうちに、愚かしい悪習や偶像礼拝を取り入れることのないようにすべきです。このように、強制したり、暴力を使ったり、流血することをせずに、愛のうちに、

教会と国家・戦争について

優しい同意と許しをもって、知恵ある助言とけいけんで非難される所のない生き方をもって、神の国を助け、助け、守ることができます。

* * *

政治を行う人々よ、キリストの御言葉を信じ、神の怒りを恐れ、正義を実践し、未亡人や孤児を助け、人々の争いを正しく裁きなさい。人を地位のために恐れたり、さげすんだりしてはいけません。どん欲を憎み、罰する時はただしく罰し、神の御言葉が自由に教えられるように意図しなさい。人が真理の道を歩こうとするのを妨げてはいけません。このような高い任務につくようにあなた方を召している方の王座に頭を下げなさい。そうすればあなた方の王冠は永遠に確固としたものになるでしょう。

* * *

政治を行う人々よ、頭を低くしなさい。あなた方の言い分を聞く方は正しく、判決を下す方は偉大です。支配者たちの支配者なのです。その方は全能であり、聖にして恐ろしく、敬慕されるにふさわしく、奇蹟を行われる神であり、この天と地をお創りになり、その力ある御手の中に、あらゆる威光、あらゆる力、あらゆる支配をにぎっておられます。その神を覚えなさい。恐れることを覚えなさい。目を覚ましなさい。「あなたの会計報告を出しなさい。もう家令をさせて置くわけにはいかないから」(ルカ 16: 2) という声を聞く時が迫っていますから。

* * *

この世を治める王や支配者たちよ、あなた方の信仰とけいけんな愛はどこへ行ったのですか。神に対する恐れと燃えるあかりはどこへ行ったのですか。罪に対して死んだ謙虚な心はどこへ行ったのですか。あなた方が求め、守ろうとするのは正真正銘の現世欲ではありませんか。あなた方の家や宮廷にあるのは、きらびやかなはなやかさ、これみよがしの衣類、ごうまん和横柄、飽くことのないどん欲、憎悪とねたみ、陰口、裏切り、売春、そそのかし、ばくち、かけ、どんちゃん騒ぎ、ダンス、ののしり、決闘、暴力の類です。これがあなた方の毎日送る騎士道にかなった習慣であり、宮廷にふさわしい行動です。主の主、王の王である方が歩いた惨めさ、苦難、へり下り、愛、義のことを深く考えたことがありますか。人の子たちに教えたことを、人の子たちに残した模範のことを深く考えたことがありますか。憐れな人々のかわいそうなうめきや惨事はあなた方の耳にはとどかない。あなた方の家には貧乏人の汗がしみついており、手には無実の人の血がついています。おくり物をもって裁きを曲げ、主とキリストにさからってたくらみをします。

*

*

キリストの裁きと王国を不正に使わないで下さい。キリストだけが良心の支配者であり、その他には誰もいません。もしキリストだけがあなた方の皇帝であり、その聖なる御言葉が勅令であるのなら、攻撃と人殺しはなくなるでしょう。この世の皇帝よりも、神に耳を傾けなければいけないし、皇帝よりも神の御言葉に従わなければなりません。さもなければ、ミカ書に書かれている裁判官になってしまうでしょう。(cf.ミカ7：2～4)

「新生」から

従って新しく生れかわった人々は悔い改めた新しい生活を送ります。なぜなら、かれらはキリストにあって新しくされ、新しい心と霊を受けたのですから。かつて彼らはこの世のものに心を奪われていたが、今では天のことを思っています。かつては肉体的だったが、今では靈的です。かつては邪悪であったが、今は正しい…彼らはキリストが歩いたように歩くのを喜びとしています…

洗礼において、己の罪を主の死の中に葬り、主と共に新しい生命によみがえります。彼らは主の御言葉で心に割礼を施します。聖霊によって洗礼をさずけられ、キリストの、しみのない聖なる体に、即ちキリストの教会に、従順なメンバーとして組みこまれます。主の御言葉と真のおきてが教える通りです。

*

*

彼らは平和の子供たちで、剣を打ちのばして、すきの刃にし、槍を打つてかまにし、戦うことはもう知りません。シーザーのものはシーザーにかえし、神のものは神にかえします。

彼らの剣は霊の剣であり、彼らはそれを聖霊によって導かれた良心によって使いこなします。

彼らの王国は恵みの王国であり、この世では希望の中にあり、来たるべき世では永遠の生命の中にあります。

彼らの市民権は天国にあり、この世の創造物については感謝しながら、自分たちの生命を持続するための必要に応じて、食べ、飲み、着用にしたり、住む家にしたりします。そして御言葉の教えるように、隣人に自由に奉仕します。

彼らの教義は混ぜ物の入っていない神の御言葉です…

彼らは信じている人に洗礼を施します…

教会と国家・戦争について

主の晩餐は主の恵みと死を記念するために、また兄弟愛を刺激するために行われます。破門は高慢で、人を軽蔑する者に対して行われます—身分が高かろうと、金持ちだろうと、貧乏だろうと、関係がありません。一度御言葉の下を通ったが、今は後退した人たちや、主の家において主に逆らって生きたり、教えたりする人たちは、破門に処されます—悔い改めるまでです。